島崎藤村

瀬沼茂樹編

近代文学鑑賞講座 6

角川書店

近代文学鑑賞講座
第六巻
島崎藤村

昭和三十三年九月一日　初版印刷
昭和三十三年九月五日　初版発行

定価　三九〇円

編者　瀬沼茂樹
発行者　角川源義
印刷者　中内佐光
製本者　宮田勝太郎
発行所　株式会社　角川書店
東京都千代田区富士見町二ノ七
振替口座　東京　一九五二〇八番
電話九段（33）〇一一一（代表）

© 1958　Printed in Japan
暁印刷・宮田製本
落丁・乱丁本はお取替え致します

目

次

島崎藤村の人と作品　瀬沼茂樹　五
本文および作品鑑賞　瀬沼茂樹　二五
藤村詩集　二七
千曲川のスケッチ　五五
破戒　八六
春　一一三
家　一四〇
新生　一〇一
嵐　一二五
夜明け前　一五五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

島崎藤村の窓　二九

藤村文学の魅力　山室静　二八一

藤村の印象 I　戸川秋骨　二九三

藤村の印象 II　島崎楠雄　二九八

藤村の考え方　伊藤整　三〇五

藤村の人間像　勝本清一郎　三一

藤村と古典　吉田精一　三三

藤村と花袋　猪野謙二　三三

藤村の歴史観をめぐって　松島栄一　三四

藤村における告白　山本健吉　三五

藤村詩の影響　稲垣達郎　三六一

島崎藤村研究史　瀬沼茂樹　三三
島崎藤村参考文献目録　三六
年譜と同時代史　四〇

写真は大竹新助・角川書店写真部

島崎藤村の人と作品

瀬沼茂樹

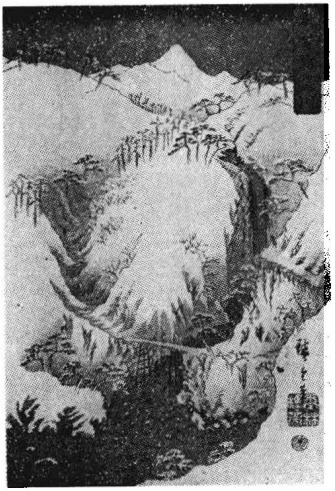
木曾の生活

島崎藤村の生まれたところは木曾の山の中の淋しい村である。ここは寒暑の差がはげしい上に、木曾山脈が花崗岩からできているために、平地もすくなく、穀物にもめぐまれていない。ただ日本三大美林の一つといわれる檜などの森林がおいたち、これが唯一の自然の賜物らしいものである。この山国の人たちは、質素で、衣食も粗野であった。同時にきびしい自然の労苦にたえる剛健な気象の持ち主であった。外界からの刺激もかぎられ、山国の人たちの協力によって暮していかなければならないような土地柄であった、そのために一体に淳朴で、信義にあついところがあった。「輝かかでも義理かくな」「人はもののふ木はひのき」「づくと根気はある程よし」など、この地方に伝わる俚諺は山国の人たちの気質を表現している。藤村の生涯を考えてみると、一生を通じて、こういう山国の気質を生きてきたことを、しみじみと思いださせる。

藤村は、木曾の山のなかでも、信濃と美濃との境に近い馬籠の旧家の出身である。徳川時代には木曾街道六十九次の宿場があって、東海道に次ぐ京都と江戸とを結ぶ街道にあたっていた。明治維新の結果、宿場は廃止となり、中仙道も木曾川沿いに改まって、ここには往来の旅人のすがたもみられぬ淋しいところに代った。島崎家は、木曾義仲の

後裔が木曾地方を領していたころにきて土着し、徳川時代には初めは代官、後には本陣、問屋、庄屋の三役を代々つとめてきた古い家柄である。村では富裕で、その大半が持ち物であったような地位にあった。維新のために世襲の職を失い、父の俠気や信仰から家産を破り、藤村の幼いころには没落した「地方の旦那衆」の一人になっていた。しかし三百年もつづいた家系の衿持は、なお幼い藤村のうちに生きていたものと、いうべきであろう。藤村が作家として名をなした後に、長男を帰農させ、ふるさとに古い家の礎をふたたび起したことには、この家柄の衿持があった。

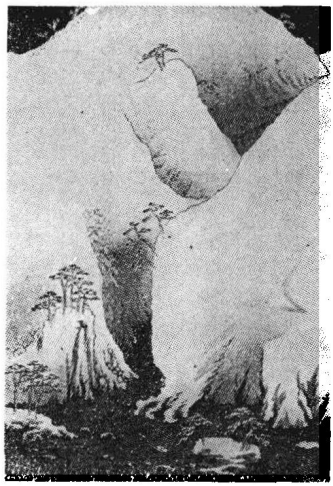
閉鎖的な山国の生活においては、古い家系は血の頽廃をまぬかれがたい。旧家の「欲望」は、その衿持を裏づけるような名誉欲や金銭欲などを意味したであろうが、同時に血の頽廃に通ずるものを含んでいたと解することもできる。大正四年版の『西筑摩郡誌』は、木曾地方の人情風俗をしるし、男女雑魚寝などの風儀の乱れを山国の人口問題に関連して述べている。こういう暗い因襲はひとり木曾にかぎられたものではなく、古い日本の祭事によくみられるものである。しかし藤村は、血統の頽廃を父の「道徳上の欠陥」で匂わせ、これを家系の秘密として自覚していたようだ。



→る谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いてゐた」とある。

それは、同時に、精神分裂症の自覚でもあったにちがいない。藤村を形づくる内向的性格はここに根ざすものであり、木曾人の気質をもって、欲望の誘惑に耐え、克己的に、簡素に、自己の生涯と芸術とを、一歩一歩きずいていく自戒の根拠でもあった。

藤村のふるさとの生活は幼い九年ばかりの間である。旅人としてふるさとを訪れたことはあるが、数え年十歳で上京してから、ふたたび木曾に帰り住まったことはない。それは、藤村が木曾の人でなかったというこ



木曾路の山川(広重画)　『夜明け前』冒頭に,「木曾路はすべて山の中である。あるところは岨づたひに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり，あるところは山の尾をめぐ→

とではないと同時に、また作家としての後年の生活をひらく重要な岐れ路であった。

木曾は山国であり、明治維新によって、かえってその開化政策からとりのこされたような山村である。村には父のひらいた寺小屋や永昌寺の住職の教える塾があり、また小学校も設けられた。しかし読み書きを習うような生活のかたわらには、迷信や因襲がふかく根をおろしていたことは、想像にかたくない。小説『幼き日』や童話『ふるさと』に語られる幼年期の回想は自然を相手とする村童たちの生活の背景に、封建的な匂いのする暗い迷信や習俗があった。父は平田派の国学をおさめ、好学の士といわれているが、遺稿『松が枝』を点検してみても、その国学は復古神道の面にたった信仰的なものであった。晩年神社にこもった父の学問は献納事件にも現われるように、日本の近代化の方向とは相いれないものになっていた。すくなくとも、人間の自由と独立とを核心とする近代文学へのめざめを養うような雰囲気をもっていなかった。藤村が笈を負うて、新しい文化の中心である東京に、幼くして出

てきたことは、文学的素質を育てる上では、決定的な転機であった。

藤村は、一八七二年三月二十五日、島崎正樹の四男三女の末子として生まれた。父は家産を破り、借財を重ねていたために隠居し、長男秀雄が家をついでいた。一八八一年、十歳のときに上京して、東京銀座の姉の家に寄寓して、東京でも有数な泰明小学校に学んだ。木曾の山の中から、明治の文明開化の真只中に出てきたようなものである。

修業時代

藤村が姉の家に身をよせたのは一年ぐらいで、次々と、知人の家にやしなわれた。故郷からの仕送りがあったと伝えられるが、幼くして両親の膝下をはなれ、他人の中でくらし、なみなみならぬ苦労をなめたことであろう。『幼き日』は、故郷での八歳の初恋を語り、そこに早熟な、暗い情熱を自覚するとともに、娘の兄にみとがめられて、ふかく自らをとがめ、第三者の眼を意識していることを語っている。こういうことは、その生涯のなかに、いくたびか繰りかえされている。藤村は身うちに激しい情熱をひそめながら、思うままに発揮しようともせず、自己を強く抑えることにつとめた。この傾向は、他人の中にあって、いよいよ助長されたものと想像される。これは、藤村がたゆたいながらも、自己自身を見つめるとともに、意志的努力をつむことでもあった。木曾人の気質や内向的性格は天性のものであったが、ここに生活者としての倫理的な風貌や、文学における独特な含蓄のある風姿を、よくも悪くもつくりだす源があった。

明治の開化政策の見本のような煉瓦造りの銀座街の裏にすまい、赤煉瓦のハイカラな小学校に通うという境遇の激変のなかで、特別に師について英語を学びはじめた。これは明治の志のある少年には普通のことであるが、さらに英語の学習・大学受験を志して、一八八七年、数え年十六歳で、明治学院に入った。明治学院は、明治文化の恩人の一人であるヘボンのひらいたプロテスタント系のミッション・スクウルである。教師の大部分は外国人であり、英語で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

多くの教科を教えるような、最も進歩した自由教育の専門学校である。英語の学習が藤村をみちびいて明治学院にまなび、さらにキリスト教の洗礼をうけるまでになったが、この信仰は外面的なものであったとはいえ、こうして自由な学苑に近代個人主義の教育をうけるうちに、藤村の第二の転機がはぐくまれていた。

藤村は、少年の日、ナポレオン伝を読み、貧しい境遇からフランス皇帝の地位にのぼった男に、大きな夢をむすんだ　やがて、この夢は、明治の青年らしく、美しい身分の高い夫人に知られて、イギリスの首相になったディズレエリのように、政治家になろうという甘い夢に変った。まわりの保護者たちは、実業家にし、海外に留学させることも考えていた。しかし、藤村は一度は陽気な宗教的雰囲気にそそられて、宗教家になろうとしたこともあったようだが、やがて文学を自己の事業としたいと思いたつようになった。ノェイクスピア、ダンテ、ゲエテ、バイロン、ワアズワスの詩作に親しみ、芭蕉、西行から近松を学んで、自己の素質や目的をおぼろげながらも自覚したのである。中島久万吉（中島信行、湘煙夫妻の子、後の実業家）、和田英作（後の画家）、川田謙作（徳富蘇峰の甥）の企てた回覧雑誌『すみれ草』（『ヴァイオレット』七、八号出たという）に新体詩一篇をのせたという、今日に伝わっていない。おそらく習作を遠く出ないものであったろうが、文学を思う心の早い発芽を意味していた。明治学院を卒業するころになると、はっきりと文学を自己のすすむ道とさだめ、独立で、自己の道を歩む決意をかためた。

藤村は、「欧米の女権と我国従来の女徳をあわせて」婦女改良をめざす『女学雑誌』などに寄稿をはじめ、これが機縁でミノノション・スクウル明治女学校の教壇にたった。ここで教え子の一人佐藤輔子に心からなる恋をし、相手もこれにこたえるところがあった。しかし、輔子には許婚者があり、家庭もちがっていて、とうてい遂げられない恋であった。北村透谷の『厭世詩歌と恋愛』を読んで、激しく感動はしても、自由恋愛は、当時、まだ不倫と考えられていた。傷心をいだいて、教職を捨て、教会を脱して、芭蕉の「故人も多く旅に死せるあり」の言葉を力に、無目的な關西漂泊の旅にのぼった。藤村の先導者であった透谷は、「内部生命」の要求するままに激しく生きようとして、封

建的思想の強く残っている社会の現実にはばまれ、後に自殺した。人間性の自由と独立とを要求する近代思想は、時代の復古的な国粋思想と衝突して、透谷や藤村のようなキリスト教の自由思想に接した青年たちを、思いのほか、深い混迷におとしいらせた。藤村の失恋と漂泊も、この激動する時代の苦悩に深く根ざすものであった。内面的な衝動のままに、無目的な漂泊に出てはみたが、生の根本的な苦しみは解決されずに終った。

その上に、島崎家の破綻は長兄の入獄事件などと重なって、藤村の苦労を倍加した。漂泊の旅にのぼるとき、明治学院の学友戸川秋骨や馬場孤蝶らと共に、明治女学校の星野天知ら、また透谷も加わって、かれらの同人雑誌といってよい『文学界』の創刊をみた。『文学界』は、紅葉・露伴を中心とする復古的な文壇に新気風をおくり、浪漫主義運動の機関となったものだが、それは文学史的な評価で、当時としてはまだ顧られるところが少なかった。藤村は、『ハムレット』や『ヴェルテル』やバイロンにならい、透谷の『蓬莱曲』などの後を追って、三篇の劇詩（トラマ）をかかげる。それは内容的には霊と肉との対立といったキリスト教的な影響をもち、どこかに暗い情熱をただよわせながら、形式的には中世ふうな近松などの古典的情緒を生かす混淆したものであった。シェイクスピアやゲエテに倣って劇詩をこころみるという新しい文学的発想も、時代にさきがけた蒼眼であったけれども、結果はみじめな失敗に終ったというほかはない。ただその苦悶する精神の姿がいちずに表現をもとめる不安定な浪漫主義の性格を文学に刻んでいたものである。

透谷が死に、やがて輔子も死んだという噂が伝わった。透谷亡きのち、『文学界』の同人たちは、おくれて加わった上田柳村（敏）を先導に、ルネサンスの研究から、次第に芸術の鑑賞に重きをおくディレタンティズムの方向に移っていった。そのときひとり藤村だけは、透谷のひらいた道に、文学者として精進することを決定した。透谷の死後まもなく、ルソオの『告白』を読み、そこに真実の自己の姿を発見し、自分らの行くべき道を教えられたという自覚が彼をささえてくれた。藤村が『ことしの夏』（明治二十八年七月）と題する幼いが清新なひびきをもった短詩九篇

を発表、『韻文について』などの詩論もみせたのは、この時からである。新しい転機が具体化しはじめたのである。

浪漫詩時代

一八九六年九月、数え年二十五歳の藤村は、東北学院の作文教師となって、単身、赴任する。それはひとりで負担していた家の重荷や暗い傷心からぬけだし、重い歌口がほころびはじめる機縁である。東北の寒冷な空気、古い伊達公の城下町のおもかげを伝える静かな落ちついた学都、一年たらずの短いミノヨノ・スクウルでの教師生活であったが、まことに夜明けのような心情で、清新な浪漫的抒情詩をうたいはじめたのである。『若菜集』の詩人、浪漫的詩人の誕生である。

詩集『若菜集』の上梓は一八九七年八月で、ここに収める五十一篇の詩は「明治二十九年の秋（註・九月）より三十年の春（註・三月）へかけてこころみし」わずか半年あまりの詩作で、主として『文学界』に発表されたものである。

さて、『若菜集』は青春の讃歌であり、詩人の青春のあけぼのが近代日本の青春にめぐりあって、はじめて歌いあげられた「生命のあけぼの」としての喜びの歌声であった。暗い漂泊から空気の潜んだ緑の宮城野にたどりついて、

春きにけらし春よ春
まだ白雪の積れども
若菜の萌えて色青き
ここちこそすれ砂の上に

春きにけらし春よ春
うれしや風に送られて
きたるらしとや思へばか
梅が香ぞする海の邊に

と、うたう春の喜びは、ここの「若菜」の意義をもこめて、この詩集の基調であった。これは藤村自身の人生に初めてめぐりあった春の姿であるとともに、日清戦争後の日本の春の現われであった。この青春の讃歌は、浪漫的自我の自覚にたった、その情熱の表現にほかならないから、おのずから恋愛詩に人間的情熱を解放する傾向をみせている。抑圧した情念が、清純に、若い希望と力とをもって発露するところ、大胆な官能的色調をもはばかるところなくみせるのである。こういう詩は、純粋の抒情詩よりも、六人の女性の運命をうたった『六人の処女』や、お夏清十郎をうたった『四つの袖』、あるいは梅川忠兵衛にとった『傘のいのち』のように、物語的な人物の心情に仮托した詩篇に、殊に濃厚なものがみられる。藤村の心情の有りかたを思わせるものである。

もちろん、『若菜集』は青春詩、恋愛詩にのみかぎられているわけではなく、『草枕』のような漂泊詩、『秋風の歌』のような自然観照に人生の落莫たる姿をよせた抒情詩など、さまざまな詩がこころみられている。また『六人の処女』から『天馬』『深林の逍遙』など、物語詩や問答詩のような形式をとるものが多く、初期の劇詩の系統をうけつぎながら、将来、小説家として立つ要素をすでに現わしている。近代的な発想を、新しい日常的な詩語に工夫して、七五調に、甘美なメロディを生みだした詩美をも忘れることはできない。

『若菜集』は藤村を近代詩人の第一人者にした。つづいて第二詩集『一葉舟』を編むころには、東京に帰っていたが、『鶯の歌』『白磁花瓶賦』など、詩篇は五篇で、他に散文九篇をおさめている。詩篇は仙台作詩が土台で、散文集

本陣隱居所跡

の趣きをもっている。第三詩集『夏草』は郷里に近い木曾福島の姉の家において編んだものである。ゲエテの「わが詩を作るは自己を鞭うつなり」という言葉を標語にしているように、この詩作のあたりから、自己の詩精神をかきたてる趣のある叙事詩的傾向を濃厚にしていることが注意されよう。『新潮』において漁夫をうたい、『農夫』において農夫や鍛冶をうたい、実生活に即する現実主義への志向をもみせてくる。こういう傾向は第四詩集『落梅集』において強くなり、そこにこれまでの浪漫詩時代との訣別がしるされる。ここでは五七調が主で、藤村詩の完成した姿も、多くふくまれている。

藤村は仙台より帰って、一時、新設の東京音楽学校選科にまなび、橘糸重について、ピアノを学んだ。詩の韻律研究のためだと伝えられるが、その直接の成果は『落梅集』におさめられた詩論「雅言と詩歌」にみられる。しかし、藤村詩そのものに、この研究がどれだけの成果を挙げたかは疑わしいので、日本語の韻律に深く苦しむところがあったことを思わせるにとどまる。こういうことは、『文学界』も終刊したのち、藤村自身が自己の詩作の限界を自覚し、摸索しながら、新しい自己の生活と文学との発展を期していたことを表明するものである。藤村が木曾福島から帰ってまもなく、函館の人秦冬子を妻に迎えるために、信州の小諸義塾に教師となって赴任し、

その最初の一年間に、ふたたび詩心をさそわれて、『落梅集』をなす詩作をこころみたのち、詩作の筆をたった。浅間山麓の小諸生活は、小説家藤村を生みだす新しい転機を、意味していたのである。

自然主義作家の誕生

小諸時代は藤村の二十代の終りから三十代の半ばまで約七年間に及んでいる。もともと重厚な山国の人であったから、多感な青年期の彷徨をすてて、ふるさとにつづく信州の土地に入って、「もっと自分を新鮮に、そして簡素にすることはないか」と、そこにひとつの自己脱皮を期していたものであろう。この町の子弟に教えなから、藤村自身は一家をかまえて、質素な生活のなかに、自然と人間とから謙虚な気持で、さまざまなことを学びとろうとした。詩的夢想を歌う人から、きびしい現実を観て、真実を知ろうとする人に出ていった。

事物を正しく見ることは簡単なことではない。同僚の水彩画家が写生していることから思いついて、「写生の方法」で、「物を観る稽古」にとりかかった。自然や人間を静かに観察して、言葉でスケッチをしていった。ラスキンにならって雲日記をつけ、小諸地方の農民の生活、行事、風物などを的確に、簡潔にとらえて、信州風物誌をつくった。後の『千曲川のスケッチ』の草稿がこれである。その志が、自然の風物のなかに、人間生活の真実の姿をとらえるにあったことは、ここにしめされている。

この藤村の企ては決して、孤立したものではなかったが、抒情詩人であっただけに、この現実認識の道は容易でなかったであろう。正岡子規の洋画から出た写生文、徳富蘆花のラスキンにならった『自然と人生』、国木田独歩のソルゲェネフを追う『武蔵野』は、相互に影響するところもあったろうが、それよりも各自が工夫をこらして新しい散文の境地をひらこうとしていた機運を思うべきである。しかも、藤村は、この機運に、「物を観る稽古」から学んだ人生の、複雑な実相を表現できる芸術のジャンルとして、小説にうって出ることを考えていたものである。すでに『文

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com